

開設25周年を迎えた 日本語日本文学科の取り組み

女子大学表象文化学部教授

はっとり
服部

たけ
匡



女子大の日本語日本文学科は、まだバブル経済の熱気のさなかにある1989年に学芸学部の一学科として京田辺キャンパスで創設された。同志社の国際主義にふさわしく、「日本語教育の専門家を養成するとともに、日本語、日本文学、日本文化の理解の上に立つて、日本の文化を海外に広く紹介し得るような人材の育成を行っていく」ことを目的とし、旧来の国文科とは異なるタイプの学科としてスタートしたのである。

折悪しく一期生の在学中にバブルがはじけ、ほどなくいわゆる就職氷河期に入ったのは不幸なことであったが、日本語教師や中高の国語科教員、マスコミ関係、一般企業その他、社会の各方面に人材を送ってきた。卒業生の中には日本語や日本文学の専門家になった方もおられ、また、海外の大学の日本語教育課程の礎を築かれた方もおられる。もちろん、家庭を守りお子さんを育てる重要な仕事に専念されている方もいる。

その後、2000年に短期大学の廃止に伴い、そちらにもあった日本語日本文学科の教員が移籍することとなった。

さらに2009年には、女子大学発祥の地に近い今出川校地に移転し、同時に、表象文化学部という新しい学部の一部として

て再編された。これにより、「表象」や「表現」に関わる科目が充実し、あわせて初年次教育科目としての基礎リテラシー」を設けるなど、カリキュラムに大きな変化があったが、「日本語」という言語の特質、あるいはその優れた表現としての日本文学に強い関心を抱いて、日本文化を広く深く理解する学生を育てる」という目標は学芸学部時代から一貫したものである。そのため、主たる領域として近代日本文学、古典、現代日本語、日本語教育の四つを設け、「入門」やゼミナール科目を通じて学びを深め、卒業研究（論文）として結実させる。

当学科の大きな特色は、アクティブラーニング系科目の充実である。「京都の劇文学とワークショップ」では専門家の指導のもとに狂言を上演発表したことがある。また、「身体表現」では劇や詩の朗読・創作などを通じて自分の表現の欲求や力に気づき、表現の喜びを実感することを目指す。

「フィールドワーク」では、古典の世界を体験的・立体的に理解することを目的に校外学習を行う。ある年には、森山由紀子教授の指導の下、物忌みによる「方違え」や、寺社参拝、夜の「歩き」など古典に描かれている人々の移動経路を実際に歩

いてみることを実践した。

また「編集技術」では、出版社の方を講師に迎え、一年間をかけて学生自身が企画・取材・編集のすべてを行い、毎年工夫を凝らした小冊子を作成する。ちなみに昨年は「京感 五感で巡る京都」という冊子を作成、配布して好評を博した。さらに「創作A・B」では、俳句作りを行い句会で互いの句を鑑賞し合ったり、句集を作成したりする。他にも「コピーライティング」「京都を読む・見る・歩く」などの科目が置かれている。

外国人向け日本語教育の分野では、体系的なカリキュラムを踏まえた実践的な教育に力を入れている。「日本語指導」の科目では、海外の連携大学、または本学その他で開設される外国人向けプログラムでの20時間以上の実習を行い、指導力を身につける。

授業以外のことで特筆すべきことは、学生の主体性による活動である。女子大学には、女性リーダーシップをとる訓練の場として優れた環境があることはよく指摘されるが、こうした活動を通じて、高校時代にはやや控えめだったと思われるタイプの人が大きく成長することがある。

毎年4月に行う新人生向けの学外オリエンテーションプログラムは、上級生のボランティアである「リーダー」たち主体で運営され、新入生が不安を解消し大学生活を円滑にスタートする上で重要な役割を果たしている。

また昨年から、学生有志の熱意と努力により、「宮沢賢治プロジェクト（Mプロ）」が始まった。関連の先生方のご助力も得て、「注文の多い料理店」「双子の星」など、童話や詩を朗読や演劇で表現する独創的な舞台上演を行い、その工夫と実行力

に観客の方からも賛辞が寄せられた。

このように、実践的な学びを通じて論理性と感性の両面を磨き、また諸活動を通じて人間としての総合力を伸ばす場を提供したいと願っている。



「身体表現」の授業風景



「日本語指導」の実習風景



宮沢賢治プロジェクト



学外オリエンテーションのひとつ：リーダーと新入生

第8回高校生模擬裁判選手権関西大会 初優勝までの軌跡

香里中学校・高等学校教諭

西村克仁
にしむらかつひと

本校は2014年8月、日本弁護士連合会主催の第8回高校生模擬裁判選手権関西大会において初優勝を果たした。本校は毎年参加してはいるものの入賞経験はゼロであった。

模擬裁判チームの結成

「今年こそ勝ちたいんです。」

今年度のチームを募集するにあたり、3年生の女子生徒は前任者から担当を引き継いだばかりの私にそう言った。これに呼応するように数人の男子が、そして下級生も加わり総勢15人のチームとしてスタートした。

模擬裁判選手権は架空の事件を題材に各校が弁護側・検察側に分かれ、その論理の整合性や説得力、あるいは表現力などを総合的に判断されて優劣を競う大会である。また、各校は参加にあたって「支援弁護士」のサポートを受ける。本校の担当となった富士崎・後岡・飯田の3弁護士はいずれも個性的な先生方であった。

当初、チームは準備らしい準備が全くできなかった。意気込みはあるものの、3年生の生徒は勉強に時間をとられて何もできないまま夏休みをむかえてしまった。また、下級生もほかのクラブと掛け持ちしている生徒が多く、このままでは勝つどころかまともに戦えるのかと心配するほどであった。

強化合宿での変化

潮目が変わったのは直前の7月末、ほぼフルメンバーで臨んだ同志社リトリートセンターにおいての合宿であった。遠足気分から始まった合宿であったが、セミナー室で資料を読み込んでいくなか、生徒の雰囲気に変化していくのを感じた。支援弁護士の先生方も駆けつけてくださり、寝食をとるにしながら本格的指導が始まった。

とりわけ、弁護側男子の担当部分は準備不足が心配されており、特訓は深夜までつづいた。いつしか一年生弁護士の飯田先生は男子たちから「鬼軍曹」と呼ばれ兄貴分となっていた。ま

た、支援弁護士のリーダー格で検察出身の富士崎先生は検察側担当の生徒から「師匠」のように慕われ、紅一点の後岡先生は「やさしいお姉さん」として男女問わず仲間として生徒たちから親しまれた。やがて、生徒たちは発声練習から声の大きさに至るまで、法廷での表現力を高めるトレーニングにも取り組むようになった。そして合宿最終日にはバスが出る直前まで本番を想定したリハーサルがおこなわれた。

決戦の日

合宿を通して、生徒たちはあきらかに変化した。誰に言われるともなく自分たちで創意工夫をするようになった。合宿から帰る電車の中で富士崎先生に教えを請う検察側の生徒を見てそう思った。

いよいよ大会当日。抽選の結果、第一試合に弁護側が立命館宇治高校と、第二試合で検察側が西宮市



本校弁護側による冒頭陳述の様子

立西宮東高校と対戦することが決定した。支援弁護士の先生方による激励のもと、生徒たちは戦う姿勢に入った。冒頭陳述を暗記し、全員がまるで芝居のように検察を演じる立命館宇治高校に対し、本校は全体としての統率感はないものの、それぞれの立場でそれぞれの構築してきた論理で勝負しようとしていた。特訓を重ねてきた男子の緊張感が伝わってきた。

「いけますよ。論理構成はウチの方が上です。」

第一試合が終わったあと富士崎先生にそう言われ、私は心強くなった。第二試合では個性派ぞろいの本校検察側が本領を発揮し、安心感のある試合運びを展開した。両試合とも1年生の生徒が絶妙なタイムキーピングで上級生をサポート、これにより準備した内容は規定時間内にすべておさめられた。知らず知らずのうちに生徒たちは自分の持ち場で自分の個性を発揮するようになっていた。

大谷総長臨席のもと、四国強豪校との交流戦へ

試合結果は冒頭に記したとおりである。優勝校として名前を呼ばれた瞬間、私は思わず支援弁護士の先生方と握手をした。同時に、嬉し涙を流していた3年生のチーム代表の姿に少し胸が熱くなった。生徒たちは誰か強制されることもなく、自分たちで考え、利用できるものは利用して自分たちで強くなり、そして初優勝を勝ち取った。担当教諭の私は傍で見ていただけで、何もしていない。まさしく同志社らしい勝ち方であった。残念ながら模擬裁判選手権は各地方の大会にとどまり、全国

大会がない。したがってこれ以上の試合はないのだが、予期せぬ番外編があった。四国の強豪・高松第一高校から申し出があり、関西優勝校として挑戦を受けることになった。場所は同志社大学法科大学院模擬法廷、しかも大谷實総長の臨席のもとというこの上ない舞台が用意された。

交流戦としておこなわれたこの試合は勝敗こそつかなかったものの、支援弁護士の方先生方も再び駆けつけてくださり、優勝校の戦いとして素晴らしいものとなった。試合の打ち上げでは法曹を志す両校生徒たちが大谷総長から直筆のサインをもらうために長蛇の列をつくるなど微笑ましい雰囲気の中、今季のチームは最後の戦いを終えた。次は下級生たちの番である。連覇を目指し、来季もまた熱い夏を過ごせればと思っている。



念願の初優勝を果たした本校チーム

同志社 クローズ・アップ

〈新聞リレーノート〉の試み

女子中学校・高等学校

国語科 (文責・山田哲久)

やまだ あきひさ

中高生の〈読解力〉の低下があらゆるメディアで大きく報道されたのは、PIISAの読解力試験の結果がきっかけだった。その後、PIISAの読解力試験の結果に改善が見られたこともあり、最近ではあまり報道されなくなつたが、〈読解力〉が基礎学力として重要なことに違いはない。〈読解力〉は国語という教科だけの問題ではなく、あらゆる知的行為において必須の能力である。同志社女子中学校・高等学校でも生徒たちの〈読解力〉向上という課題について、学校を挙げて取り組んでいる本校では、その一つの試みとして、2012年度より高校生を対象に「新聞リレーノート」(以下、「リレーノート」)を実践している。「リレーノート」を実践することになった経緯や、その理論的背景に関しては別稿(同志社女子中学校・高等学校年報「薨」46号、2015年7月発行予定)に譲るとして、本稿では「リレーノート」の概要と、その実践例、身に付けることのできる能力や問題点について述べてい。

「リレーノート」は次のようなルールに従って実践される。

7〜8人をつきの班とし、各班の記事選択者が選んだある新聞記事の内容について、各班のメンバーが意見をリレー

していくもの。ただし、リレーする際には、必ず自分より前のメンバーの意見を踏まえないといけない。

つまり、新聞記事を読み、その記事についての他者の意見を読み、他者の意見を批評しつつ自分の意見を述べる、という作業を行うものである。

「リレーノート」はまず、記事選択者(生徒)が「新聞記事を選ぶ」ところから始まる。記事選択者は議論に適した記事を選ぶ必要があるため、新聞記事を正しく「読解」する必要がある。記事選択を誤った例としては次のようなものがある。例えば、「STAP細胞」に関する記事を選択した班では、高校生では「STAP細胞」の再現可能性という専門領域に踏み込むことができず、発見者を「信じる」か「信じない」かの議論になつてしまった。このような議論を回避するためには、自分が選んだ記事が議論に適したものであるかを「読解」する能力が求められる。

次に生徒達は「選択された記事について、自分の意見を述べる」という作業を行う。この段階で生徒たちに散見される傾向は、客観的な「意見」ではなく「感想」や「願望」を述べてし

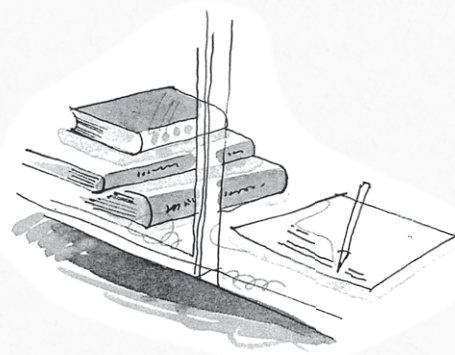
まうということである。例えば、「小中学校の統廃合」についての記事に関して、行政に対して「もつと検討してほしい」という「願望」を結論として提示した生徒が多数いた。「感想」や「願望」ではなく、客観的な「意見」を述べるためには、記事から問題点を抽出して、その問題点を分析する必要があるため「批評力」が求められる。

最後に生徒達は、「前者の意見を踏まえて、自分の意見を述べる」という「リレー」の作業に入る。新聞記事とこれまでの議論を比較し、その差異を踏まえながら自分の意見を述べる必要があるため、この作業においても「読解力」「批評力」「論理的思考力」が求められる。この段階では、生徒達に他者の意見を批判するのを避けようとする傾向が見られる。自分が批判しないことで批判されることを回避しているようにも思える。「リレーノート」は前の意見を批判しない限り、議論が広がらない。よって、生徒達には「批判」は意見を「批判」するのであって、その人の人間性を「批判」することとは違う。ただし、相手の意見を論理的に理解しない限り、「批判」はできない。だから、しっかりと前の意見を「読解」するようにと指導する。

では、「リレーノート」における我々教員の役割とは何か。「リレーノート」では、生徒達の「リレー」の最後に教員のコメント欄を設けている。このコメント欄を通して、生徒達の議論の軌道修正や記事選択の問題点を指摘する。コメント欄で生徒達の「リレー」を「批評」することが教員の役割としては最も重要になるだろう。

もちろん、「リレーノート」の試み自体に問題がないわけで

はない。例えば、記事選択に関して、高校生に議論に適した新聞記事を選択させるのは負荷が大きいのではないかという意見もある。この点に関しては、生徒達が慣れるまでは教員が記事を選択したり、記事選択のポイントを説明するなどの対策が必要になるだろう。さらに、現時点では「リレーノート」は国語科の担当になっているが、各教科が分野毎に分かれた「リレーノート」を実践することができれば、よりその可能性が広がるのではないかと考えている。



同志社 クローズ・アップ

国際中学校・高等学校として 国際バカロレアを考える

国際中学校・高等学校教諭
IB調査研究委員会委員長

いまい
かずひろ
今井 一宏

近年、教育のグローバル化が叫ばれ、世界標準のカリキュラムとして国際バカロレア（IB: International Baccalaureate）についての関心も高まっている。また、来春から本校では、IB教育を実践している同志社国際学院（DIA）初等部からの卒業生の受け入れが始まる。このような背景から本校では一学校としてIBに関する調査研究を行っているが、本稿ではディプロマプログラム（DIP: Diploma Programme）を中心に、その一端を紹介したい。

IBの特徴

「IBは英語による教育である」と思われている方も多いと思う。しかしこれは、IBのプログラムの一つであるDPを側面的に見たものにすぎない。

IBは、日本の小学校課程に相当するPYP（Primary Years Programme）、中学～高校1年に相当するMYP（Middle Years Programme）、高校2～3年に相当するDPの3つのプロ

グラムをもつ。（これ以外に、IBCCというキャリアプログラムもある。）もともとIBは、主に外国人の子どもが学ぶインターナショナルスクールのカリキュラムとして作られたため、英語で授業が行われることが多いのは当然である。しかしPYPとMYPはどのような言語で授業を行ってもよいことになっているし、DPは英語（またはフランス語、スペイン語）での授業が義務づけられているものの、「日本語DP」では多くの科目の授業を日本語で行うことも認められている。（とはいえ、一般的な高校生にとって、一部の科目であっても英語で授業を受け、英語でディスカッションを行い、英語で試験を受けることが容易でないことはいうまでもない。）

なぜIBが世界標準のカリキュラムといわれるのか？まず、「多様な文化の理解と尊重の精神」、「探究心、知識、思いやり」に富んだ若者、「人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人」といった表現が並ぶ「IBの使命」（私立学校の motto「教育理念」に似た性格のもの）はまさに世界標準にふさ

わしいものである。(これらは国際中学校・高等学校が育てようとしている生徒像にも極めて近い。)そしてIBの最大の特徴は、徹底的な探求型学習(アクティブ・ラーニング)であるということである。教育の目標を、知識の獲得ではなく、多様な考え方のできる知力(概念的な理解)の育成に置いている。これは日本の従来型の教育の考え方と大きく異なるものである。しかし、文部科学省の目指す教育改革はこれと同じ方向を向いていることから、日本においても将来的には、IBの教育手法が一つの教育手法として根付いていき、教育を受ける側でもIBが選択肢の一つとなることは十分に予想される。

IBDPのフレームワーク

DPのフレームワーク(カリキュラム)は、「言語と文学」(母国語、すなわち日本語)、「言語習得」(外国語、すなわち英語)、「個人と社会」(経済、地理、歴史など)、「科学」(生物、化学、物理など)、「数学」、「芸術」の6つの教科領域と、「EE(Extended Essay)」、「TOK(Theory of Knowledge)」、「CAS(Creativity/Action/Service)」の3つのコア科目(必修学習)からなる。2年間にわたり、教科領域の各グループから1科目ずつ、うち3〜4科目はHL(Higher Level 各240時間)、残りはSL(Standard Level 各150時間)として履修する。「芸術」の枠は他の教科領域の科目に代えることも可能なため、国内のIB認定校では「個人と社会」や「科学」の2科目を配当している例も多い。また「日本語DP」でも、少なくとも2

科目は英語での授業と試験を受けることになる。

その授業は、「英語」は非常に洗練されたもので、ハイレベルで学習に長い時間を費やすことが求められるが、本校の上級(Sa)クラスの授業内容と大きく変わるものではない。その一方で「日本語」は、外国語としての日本語の域を脱していないようにも思われる。全般的に見て、広い知識を身につけるのではなく、ある領域を中心にした探求を徹底的に行うことになる。これらの課程を全て修了し、世界共通で実施される最終試験に合格するとIBディプロマが取得できる。ディプロマの取得には45点満点中24点以上のスコアを取得する必要があるが、世界のDP履修者の中でのディプロマの取得率は80%程度である。

IB認定校とIBディプロマによる大学進学

日本国内のIB認定校の数は27校、うち一条校は7校のみである。(2014年12月現在)(法人内ではDIAの国際部(DISK)がPYPとDPの認定校、初等部がPYPの候補校である)。文部科学省はIB校を2018年までに200校に増やすという目標を設定し、「日本語DP」もそのハードルを下げるために導入されたものであったが、現在のところ候補校は10校に満たない。

DPに限定して述べると、IB校がなかなか増加しない原因は、従来型教育の手法との大きな違い、英語によって授業に参加することの困難さ、そして、次に述べるように大学進学についての課題が多いことなどがあげられよう。

IBディプロマの取得により、国を超えた大学選びが可能になるといわれる。そのスコアが大学の入学資格として扱われる(ディプロマだけで入学できる)のはイギリスなど一部の国に限られてはいるものの、欧米を中心に、IBディプロマは大学入学審査に積極的に活用されている。一方、国内では、国内の高校で取得したIBディプロマで出願できる大学の数や募集人数は少なく、入試で学力試験が課されるところもある(知識量が問われる学力試験では、DPで学習してきた生徒は極めて不利である)など、現在はまだ課題も多い。したがって大学進学に対する明確なビジョンをもっていない限り、DPの履修は大きなリスクを伴うことになる。(実効性のある大学入試改革が待たれるところである。)

国際中学校・高等学校として

国際中学校・高等学校は帰国生徒の数が全体の3分の2を占め、充実した英語教育やグローバルな教育環境を提供し、さらに、課題解決型の授業も数多く行っている。その点では、本校がIBの授業を行うことへのハードルは、他校に比べて非常に低いように思える。しかし、生徒に広く高度で詳細な知識を身につけさせたいと、生徒の興味・関心や将来の進路に応じて多様な科目の選択が可能であることが特徴の本校のカリキュラムと、画一的ともいえるDPのフレームワークは根本的に相容れない。また、同志社大学、同志社女子大学を含めて国内の多くの大学がまだIBディプロマに門戸を開いておらず、現在の

ような多様な進学先の確保も困難になる。(海外大学への進学はIBディプロマの取得によって有利にはなるが、本校がこれまで培ってきたノウハウで太刀打ちできないようなものではないし、そのことによって生徒の進学状況が大きく変わると考えられない。)

このようなことから、本校ではIBそのものを導入するのではなく、そのよいところを積極的に取り入れていくこととした。その一つが学校設置科目「知の研究」の開講である。DPのコア科目である「TOK」は、知識の構築についての探求を行い、論理的思考力や課題解決力の育成を目的とする科目で、探求型学習にとって、基礎的かつ非常に重要な位置づけにある。「総合的な学習の時間」と似てはいるが、その内容や位置づけは大きく異なるものである。本校では2015年度から高校2年生で、この「TOK」の考えを取り入れた「知の研究」を開講する。これによって、従来から行ってきた課題解決型の授業にしっかりとした基礎づけを行うとともに、コミュニケーション能力やクリティカル・シンキングの力のより一層の育成を図りたいと考えている。さらに、本格的にDPの教育を受けたいと考える生徒のために、IB校であるDISKとの教育の連携ができないものかと、期待も抱いている。

DIA初めての修学旅行 〜Our trip to the U.S.A.〜

国際学院初等部教諭 口ハス亜紀／岡田智明

修学旅行に向けて

「行つてきま〜す！」子どもたちの声が空港にこだまします。2014年9月2日―この日DIAの6年生は、修学旅行のためアメリカに向けて出発しました。ニューヨーク、ボストン、アーモストを10日の行程で周るのです。この日のために様々な準備をしてきた子どもたち。期待に胸を膨らませて飛行機に乗り込みました。

この修学旅行には3つの目的がありました。1つ目は、同志社の一員として、新島襄のアメリカでの軌跡をたどり、彼の思いに触れること。2つ目は、4月から交流を重ねてきたアメリカ現地校2校との交流。3つ目は、国際バカロレア（以下IB）の学びの一環として、国連を訪れたり美術館を訪れたりしながら探究を深めることです。本稿ではこの目的に沿って、本校の修学旅行での取り組みを紹介したいと思います。

「実物を見て学ぶ」IBの学びと関連させて

修学旅行2日目 国連を訪れました。IBの学びを深めるための現地訪問です。ここでは国連の役割を学ぶとともに、当日

行われていた国際会議の様子を見学しました。ガイドの方に解説してもらいながら、各国から贈呈された絵画やモニュメントを一つひとつ丁寧に見た後、世界の紛争地帯の現状を学びました。人を大切に思う気持ちが戦争を防ぐこと、そのために私たちが今できることは、自分の隣にいる人を知り、大切にすること。子どもたちの真剣な眼差しが、学んだことの大きさを物語っていました。IBも、新島が学んだアーモストカレッジも「実物を見て学ぶ」ことを大切にしています。アメリカにやって来た自分の学校の生徒たちを、新島も温かく見守っていたに違いありません。

現地校との交流「Hello, Friends! フロント」

修学旅行3日目は The International School at Dundee (ISD)*、4日目は International Magnet School for Global Citizenship (IMS) を訪れました。「どんな日本文化を伝えようか」。子どもたちは出発前から熱心に考え、「日本らしいもの」を合言葉に「折り紙」「剣玉」「コマ」「将棋」「日本の踊り」「書道」を選びました。日本から道具を持参し、いざ学校訪問です！

エピソードつながり

今回の修学旅行では、オールド・サウス教会で引率教員の大時代時代の恩師に遭遇し、下見では同志社出身の語学研修中の女性に会い、そして、帰国時には利用した航空会社の副操縦士の方が同志社大学出身の方でした。修学旅行を通じて偶然の出会いが続く、同志社が生んだ人と人のつながりを感じる素晴らしい行事となりました。



オールド・サウス教会前にて

新島襄の足跡をたどる旅〜キリスト教主義〜
どの訪問地でも、子ども達は新島が何を感じていたのか想いを馳せることができました。ここでは、オールド・サウス教会での体験を紹介します。

教会に到着すると、教会員の方が玄関ですぐに挨拶に来て下さり、礼拝前には、「今日は、日本から新島襄の勉強をしに来た同志社国際学院の子ども達が一緒に参列しています。」とアナウンスされ、大きな拍手で迎え入れていただきました。礼拝中には、参列された多くの方から笑顔で握手を求められ、お守りとなる特別なキーホルダーも全員にいただきました。教会員の方々は新島のことを知っていて、エピソードを交えながら丁寧に教会の歴史や建築様式の説明をして下さいました。優しさに包まれた充足した時間を過ごすことができ、新島もこの雰囲気、キリスト教の精神を、この教会で強く感じたことと思います。同志社がキリスト教主義を掲げて創立されたことが、心の底から理解できたような気がした貴重な訪問になりました。



国連会議室にて



ISD交流会のランチルームにて